令和５年度学校教育の努力点とその推進計画

１　研究主題について

「自ら、ともに、学びを深める正色っ子」

２　主題設定の理由

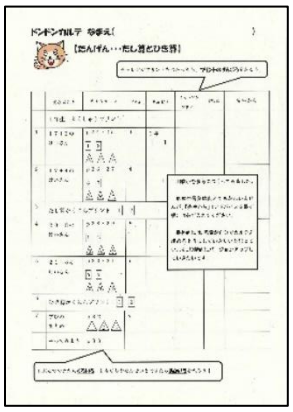
令和３年度から「自ら、ともに、学びを深める正色っ子」をテーマに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指し、個別学習とプロジェクト型学習に取り組んできた。名古屋市学校教育の努力目標及び重点事項においても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は重要とされており、本校の努力点研究は、今日的な課題の追究となるものと考える。

さて、昨年度の取組は、個別学習（ドンドンクエスト）とプロジェクト型学習（プロジェクトＳ）を二つの柱とする取組の２年目として、実践の精度をより高めることを目標として、実践を行った。

個別学習は、算数科に絞って研究を進めた。児童自身が自分の到達度を把握できるように工夫し、児童それぞれに最適化された学習となるようにすることを目指して実践を行った。児童が自分で選択できるように、難易度や学習内容の異なるプリントを複数用意している学年が多かった。取り組む時間や問題数を工夫することで、児童が得る達成感が大きくなることも分かった。取組を継続したことで、到達度の理解や集中力が向上したという成果が得られた。さらに、児童同士で教え合う姿も見られた。また、自由進度学習について現職教育で学び、理解を深めた。

プロジェクト型学習は、昨年度に引き続き、『授業づくりハンドブック』を参考にして、教師の提示した「トピック」を基に、個人やグループで探究したいテーマを設定し、ゴールに向かって探究活動を行った。３年生以上は総合、１・２年生は生活科や国語、学活を中心に進めた。「学習履歴」や「計画表」を使うことによって、ゴールの確認や活動の振り返り、次時の内容の明確化ができ、昨年度と同様の成果が得られた。中間発表や評価会議を取り入れることで、児童同士で教え合ったり学び合ったりする協働的な学びができた。自分のするべきことが理解できたり、学習内容が身近なものであったりしたことで児童の学習意欲が上がることが分かった。また、評価会議をグループごとに行ったり、それぞれの得意を生かした役割分担をしたりと、協力する姿がいろいろな場面で見られるという成果が得られた。どちらの取組も、年２回の学校開放日（前期・後期各１回）で実践を保護者に参観してもらうことができた。

しかしながら、個別学習では、児童自身に到達度を把握した上で最適な課題を選ばせたり、課題をどのように行うと学習内容が身に付くかを理解させたりするまでには至らなかった。また、プロジェクト型学習では、調べ学習やまとめ方については一定の成果が得られたが、発表の仕方の指導や振り返りを意味のあるものにすることが、課題として残った。



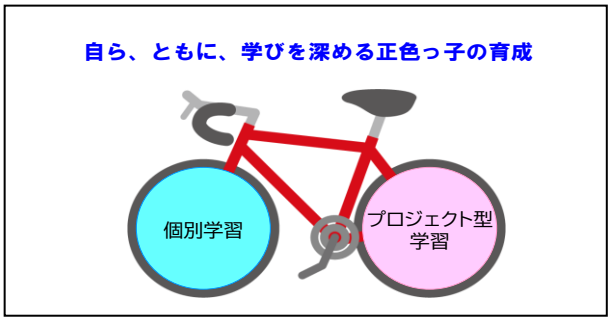
今年度は、努力点研究の３年目として、個別学習では、自由進度学習の実践を各学年で行う。NINO（認知能力検査）を取り入れ、「カルテ」（ドンドンカルテ）を作成することで、児童自身が最適な課題に取り組めるようにしていく。さらに、授業の中での個別最適な学びと協働的な学びの位置付けについても研究を進めていきたい。また、プロジェクト型学習では、児童の意欲がより高まるものになるようにトピック(内容)を再検討し、子どもが「やった感」(やり遂げた自信)をもてるように支援していく。さらに、調べたことを効果的にプレゼンする力を、発達段階に合わせて育てていく。

３　実践の進め方

３年目となる今年度は、個別学習（ドンドンクエスト）とプロジェクト型学習（プロジェクトＳ）のどちらの実践も、代表授業を参観したり各クラスの実践を録画したりして、教員同士で検討する時間を設定する。個別学習（ドンドンクエスト）は、昨年度と同様、算数科に絞って研究を進める。「自由進度学習」をまず１学期に１単元、児童のつまずきが分かりやすいところを選んで全学年で取り組む。そして、「児童カルテ」を作成し、振り返りや教師からのアドバイスを書き、児童自身がどう伸びたかを把握できるようにする。「自由進度学習」と「児童カルテ」を行うことで、児童が自分のミスを理解し、課題に取り組んだことによる自身の成長を実感できるようにしたい。さらに、２年生以上は、ＮＩＮＯ（認知能力検査）を行い、学習支援に活用する。プロジェクト型学習（プロジェクトＳ）は、３年生以上は総合、１・２年生は生活科や国語、学活を中心に進める。プロジェクト型学習で学ばせることを教師が吟味し、児童が「探究したい」と思えるようなトピックを提示し、「やり遂げた」自信をもてるように支援する。さらに、調べたことを効果的にプレゼンする力も育てたい。

今年度も、年２回の学校開放日（前期・後期各１回）で実践を保護者に参観してもらう機会を設定する。プロジェクト型学習の進め方は、名古屋市教育センター『授業づくりハンドブック』を基本とし、学びの進捗状況や足跡が分かるワークシートの工夫をする。実践後の振り返りや中間報告会の時間を効率的に確保し、ロイロノートを活用して各学年の取組の進捗状況を把握できるようにする。

各学年の取り組みは中間報告会や最終報告会で共通理解するとともに、実践を録画して検討会を行う。また、昨年度の学校評価アンケートでは、保護者に取組が十分に伝わっていないことがうかがえた。授業参観だけでなく、学年だよりでも二つの取組について紹介できるとよい。



４　授業実践内容

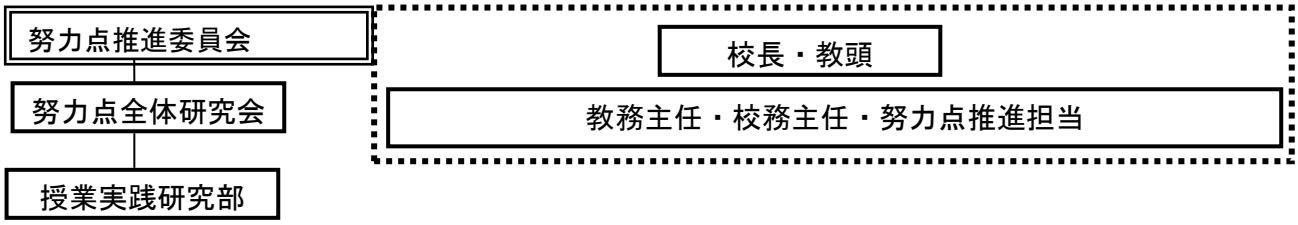
(1)　授業実践について

個別学習（ドンドンクエスト）とプロジェクト型学習（プロジェクトＳ）の取組について、担任全員が、年間２回（前期・後期）の授業実践を行う。（１年生は、前期はドンドンクエストの実践のみ行い、プロジェクト型学習は実践しなくてもよい。）前期の個別学習の実践は、全学年自由進度学習で行う。前期・後期も１回ずつ、学校開放日に、学校努力点授業参観で保護者に公開する。公開する授業がどの場面で、その学習に至るまでにどのような学習の経過をたどってきたのかを、教室掲示で保護者に周知する。実践の様子は、学校だよりだけでなく、学年だよりでも紹介することが望ましい。

(2)　評価計画

主体的に学ぶ態度の評価方法は、各学年の教育課程に準ずる。個別学習（ドンドンクエスト）、プロジェクト型学習（プロジェクトＳ）どちらの取組でも、使用したプリントや参考にした資料があれば、共通理解できるようにする。

５　学校評価の計画

- 努力点に関わる授業参観を、全学年で年間を通じて二度実施する。
- １月に、自己評価のための保護者アンケートを実施し、資料を得る。
- 学校評議員会で、教育活動への意見を聞く。
- 学校評価全体会、及び、努力点全体研究会で最終的な評価を行う。

６　研究の組織